女の新聞 100年を生きる。

高齢や病気であきらめていた海外旅行や思い出をたどる旅、今からVRで出かけましょう!

登嶋健太さん
とし ま・けんた　東京大学先端科学技術研究センター・稲見・檜山研究室・学術支援専門職員、1986年生まれ、高齢者デイサービス勤務を経て現職。

右・登嶋さんが装着するのは音声と映像一体型VR機器「Oculus Go（オキュラス ゴー）」。スマホで簡単にVRが楽しめる「ハコスコ」というシンプルな紙製タイプも。左・VR機器でいながらにして世界旅行に出るシニア。
左写真提供・登嶋さん

老後にしたいこと調査で常にトップ3に入る「旅行」。でも現実は、健康や体調の不安から外出がままならなくなったり、計画の変更を余儀なくされる人も。

「高齢者のデイサービスで働いていた頃、旅行や外出の思い出を語られる時の利用者さんはイキイキされ、会話が弾むことを実感していました。たとえできなくなっても旅への思いはずっとあるんだと」と登嶋健太さん。VR（ヴァーチャルリアリティ＝仮想現実）の技術を使って、旅行が難しくなった高齢者に行きたい所や思い出の場所を訪ねてもらう研究と活動に取り組んでいる。仮想旅行の魅力、取り組みの経緯などを聞いた。

高齢者とVR。一見、縁がなさそうだけど実際に体験してみると、心（旅したい気持ち）と身体（できない身体の現実）のギャップがある程度まで縮められ、不自由が増える高齢生活にこそ活用のしがいがある技術だと実感する。

使い方はいたって簡単。大きなゴーグルのようなものをつけるだけで、まるで自分がそこにいるかのようなリアルな映像と音が体感できる。観られる映像は、現在のところ登嶋さんが高齢者のリクエストに応じて撮り溜めた世界と日本の著名な観光地から、パーソナルな思い出の街や近所の公園まで約250本。

「普段は不活発で口数の少ない人も、装着した途端、映像を無意識に追うので自然と頭や首が動き、それが全身に伝わって身体を動かしたり立ち上がったり。自然なおしゃべりも始まります。させられるのではなく能動的に観るメディアであることが、高齢者のさまざまな機能の維持や向上に役立つのではと考え、研究を続けています」

仮想旅行の発想は介護職員時代の利用者との関わりから生まれた。

「旅行や外出の会話は尽きないので、休日を利用して近所の公園や景勝地などの写真を撮り溜め、お年寄りに見てもらいながら会話する機会が増えていました。写真を見ると記憶が喚起され、『その右に店があったでしょう』とか『この店は○○が美味しいの』など写真を見る前は予想もしなかった話が次々に。ちょうど同じ頃にVRや360度写真の存在を知り、これがあれば高齢者自身が見たいものを自分で選ぶことができる、と」

業務の合間にメーカーを訪ね、機器や技術を学んだ。問題は映像をどう集めるか。登嶋さんの行動力が光るのはここからだ。

「クラウドファンディングに挑戦して資金約85万円を集め、1年間休職して世界一周の旅に出ました」

日本から西回りでアジア→ヨーロッパ→北米→南米へ。サンフランシスコでは日系の高齢者施設を飛び込みで訪ね、持参した日本の景色をVRで楽しんでもらう経験も。帰国後、再び介護現場で働きながら撮り溜めた映像をさらに多くの現場で披露し、高齢者の要望やリハビリなどへの役立て方などを探り続けた。'17年からは取り組みをVR学会などで発表する機会を得て、それを機に現在在職する東京大学先端科学技術研究センターで研究する道が拓けた。

「介護職は離れましたが、介護施設の利用者に思い出の場をVRで訪ねてもらう試みは続けています。夫婦で海外旅行をよくしたという90代の女性は、亡き夫と旅したイタリアをVR体験し、『ここで雨に降られてアーケードに駆け込んだ』とか『夫は無口だったけど、あそこ行こうって誘うと、ウン！て』と思い出をまるで先日のことのように。高齢者はVRで未知を体験するというより、思い出を味わい直すことに意味があるのでしょう」

VRが高齢者の心身機能にもたらす効果を実証する研究を続けながら、元気なシニアに映像を撮ってもらうワークショップも主宰。

「観たい人と撮りたい人をVRでつなぎ、シニアの暮らしに新しい風を吹かせたいと思っています」

●介護に関する体験、ご意見、今後、話を聞きたい人や、取り上げてほしいテーマなどがありましたら、はがきか封書で、〒104-8003 東京都中央区銀座3-13-10 マガジンハウス クロワッサン編集部「女の新聞」係までお知らせください。

撮影・岩本慶三（登嶋さん）　文・寺田和代